

『新納忠元上洛日記』について

白井忠功

標題の紀行文学は、九州史料叢書『近世初頭・九州紀行記集』に所収されており、その解題には、

新納忠元は薩摩大口城主、秀吉の島津征伐に主人島津氏の降伏を悦ばず、最後まで抵抗しようとした薩摩武士であるが、島津氏のいわば人質として文祿三年三月六十九歳の高齡をおして上洛した。そのコースは大口より遠路はるばる日向路を経、日向徳洲より解纜、瀬戸内海を進んだが、下文を欠き、播磨室で切れている。

と簡潔に記述されているのである。いま、同書を披見し、戦国時代末期（中世期末）、遙るか南九州薩摩大口の地から、京都を目指して旅をした武将の筆になる紀行文学を考察してみたい。

1

新納忠元（大永六年一五二六―慶長十五年一六一〇）は、武将の威名高い人として知られていた。一方、古典にも通じ、和歌、連歌にも堪能な人であった。

彼は、天文七年（一五三八）、十三歳の折り、父加賀守祐久に従って島津貴久に謁し、爾来、島津氏の家臣として、義久、家久に任せ、その武勲は筆舌に尽し難い程の活躍をしたのである。

天文十四年（一五四五）、貴久の入来院重朝を郡山城に攻めるに従い、愈々その存在が注目されてきたのであった。

永祿三年（一五六〇）には、伊東氏と島津氏との抗争の続く中、將軍足利義輝の謀りを受けた伊勢貞運の和睦による樺山義久、北郷時久との対応にも屈せず、忠元は飢肥の地を守ったのであった。

永祿九年（一五六六）、島津貴久は、長子義久に守護職を譲り、剃髪して伯圀と称した。義久ら四兄弟（義弘、歳久、家久）は、智識の勇将であり、兄弟四人同心一体となって、島津家の三州統一（薩摩・大隅・日向）を為したのである。その着手の第一が、菱刈氏討伐であった。

永祿十一年（一五六八）、島津氏は総力をあげて大口城を攻め、菱刈氏の反撃に会い苦戦し、忠元も生命の危険に遭遇したという。翌十二年八月、いよいよ島津氏は、大口城を陥入れ、二ヶ年に及ぶ抗争は終わったのである。戦功のあった忠元は、大口城地頭に任ぜられ、島津氏の肥後口の固めとなったのである。時に忠元は、武蔵守を命ぜられ、それより驍勇をもって鳴り、鬼武蔵と称せられたのであった。

九州制覇の夢を抱いていた島津義久は、着実に勢力を拡大していった。その中には、忠元が加っていたのは言うまでもない。水俣の相良氏、豊後の大友氏の対決にも、忠元の活躍がみられるのである。とくに、豊薩の争いに、豊臣秀吉が調停（使者、鎌田政広）に乗り出し、その策を承知しなければ、薩摩を親征すると強気の言を伝えたのであった。しかし、島津氏は、秀吉の調停を意に介せず、既定の方針通り大友討伐にとりかかった。豊後の諸城は、島津氏の猛攻にあつて、ことごとく降つたのであった。忠元も義弘に従って、豊後高城等数ヶ城を陥した。天正十四年（一五八六）十二月、秀吉の派遣軍、大友義統の連合軍が、利満城下において島津家久軍と戦つて大敗した。そのため、大友氏の勢力は豊後から完全に掃蕩され、薩摩・大隅・日向・肥後・肥前・筑前・筑後・豊後の八州は島津氏の覇権のもとに陥伏したのであった。まさに、この時期の島津氏は旭日昇天の勢いであつたといえよう。

天正十五年（一五八七）、秀吉は弟大納言秀長を日向口へからせ、秀吉自身は肥後から薩摩に侵入しようとした。秀長は日向口根白坂での決戦において、島津軍の凄まじい反抗にあい難渋したが、遂に勝利を得た。安国寺恵瓊らのすめにより秀長・義久は和したのであった。一方、肥後口より侵入した秀吉軍は、川内の泰平寺に陣を置き、義久との和議が成り、義久は剃髪して龍伯と号した。五月八日泰平寺において秀吉に謁し、薩摩国を安堵された。（義弘は大隅、伊集院忠棟は肝付一郡、義弘の子久保には日向諸県郡及び真幸院の地を与えられ、島津氏は安泰であつた。）

鬼武蔵とよばれた勇将・新納忠元は、三州統一から九州制覇に至る大小無数の

戦いで、その武勲赫々たる知勇兼備の人であったが、義久の勅降によってやむを得ず降り、剃髪して拙斎と号したのであった。

『常山紀談』にも「新納武蔵守豪氣の事」の記事があり、忠元の面目躍如たる勇姿が記述されている。その忠元も主君義久が秀吉に降ったことは如何とも仕難く、

主君既に降参せし上は家臣の身としていかで其の心に背かんや。弓箭の礼儀をもてかく申したるにてこそ候へ。日本の軍を城に引受くる事に士の面目にて候。

と、大口城を出たのであった。義久と共に秀吉に謁した折りも、毅然とした態度であったことが語り伝えられているのである。

『九州御動座記』は、秀吉の島津征伐のために九州に下った時の記事である。その中に、

一、大隅曾木迄・四里（天正十五年・五月二十六日）

此所に而新納武蔵守出仕申候、總而御禮可申上之處に、無事の果口を不知候事を、義久伊集院に不足に付而、嶋津落着之後まで御敵を申候き、嶋津家老と申ながら武者之覺、又は人数持にて千石權兵衛尉討負候時、武蔵守先陣を相守候、此所より還御なり。

がみえる。忠元が島津氏落着の後まで敵対していたのである。島津氏家老といへ武者の面目を全うした様子がうかがえるものである。

文祿元年（一五九二）、秀吉は狂気の沙汰ともいふべき証明、征韓の軍を起こし、諸將の妻子を大阪にのぼらせ、肥前名護屋に本営をおいた。島津義久は「所勞」の故をもって辞退し、義弘、久保父子が加わった。忠元も老齢で、子息忠増をかわりに遣わしたのであった。その折り「あじきなきや唐土までもおくれじと思ひしことも昔なりけり」と詠んで義弘に贈ったのである。秀吉の征韓も、彼の死去によって中止となったのはいうまでもない。（慶長元年一五九六・八月三日）。それより早く、文祿三年（一五九四）三月、忠元は主君義久の上洛に従っているのである。時に六十九歳であった。

2

忠元が文学愛好家であったことは周知されるころであったが、いま、その多くを知ることは難い。さいわいに、重松裕巳氏「中世末期武将の連歌―新納武蔵守忠元の場合―」の論文を披見することができた。忠元の連歌文学についての貴重な論考であり、有益であった。重松裕巳氏の論によって、忠元の連歌を記述してみたい。

薩州連歌文学の諸相は、中国周防、大内氏の連歌師招請の流れを汲むものであったらしい。周防大内氏の京文化摂取は、他家に比してその熱意は並々ならぬものがあつた。宗祇を始め、実力ある連歌師の西下が、物語るところである。周防まで西下した連歌師の多くは、筑紫太宰府詣での旅を続けたのであつた。それら連歌師のなかには、遠路南の薩州の地まで足跡を残したと思われるものもある。なかでも梵燈庵主朝山師綱（明徳二年・応永十一年）や、宗碩は宗牧を伴なつて南下したことが知られる。（永正十三年、十四年）。その後、桂庵禪師（文明十年・文祿三年）等々、連歌師・公卿・高僧たちが入薩し、当地の文化芸に多大の影響を与えたものと思われるのである。享受側では、薩州島津家の臣川上忠頼の『連歌新式』書写、島津忠良主催の永祿年代の連歌会、芳溪の連歌指導による、島津家の連歌師、高城珠長・珠玄・珠全の活躍等々、島津家の連歌文学の盛んな様子がうかがえるのである。とはいえ、それら薩州連歌文学の動向を知る資料が少ないばかりか、連歌文学の作品の殆んどが残っていない様にも思われるのである。

忠元より二十歳余り年少の上井寛兼（『寛兼日記』）による筆跡が、島津義久を中心とした武将たちの連歌俳諧の文芸の在り方に、幾分かの示唆を与えてくれるのである。勿論、文学作品の記録は見当たらないところである。

忠元の連歌の作品については、次の五点が紹介されている。即ち、

- (1) 忠元連歌 一卷（元龜四年一五七三・天正四年一五七六）・自筆。
- (2) 忠元連歌 一卷（天正七年一五七九）・自筆。
- (3) 忠元連歌 懷紙一卷 墨付二十四枚 所収句四百五十句・自筆。
- (4) 忠元連歌 懷紙一卷 墨付十枚 所収句四百六十句・自筆。
- (5) 幽斎点削連歌 一卷 百韻注・自筆。

等々である。(1)は、所収句一二三八句の抜句集であって、記載は四季、四年間の連歌から成るものである。その例句は

もれぬ恵になびかぬもなし
春の立朝日も匂ふ雲霞

いつくを親に似るとかみん
雨露の恵みにさける春の花

けふ三ヶ月の春はめつらし

玉嶋やかすまぬ水の早瀬に

吹としふけはあらし山風

花におほふ袖も霞はあやなきに

いつの世よりのうきかつらさか

月に雲かかる花には山おろし

である。家老職にあった忠元の連歌への並々ならぬ熱意が窺えるといえようか。陽春の恩恵は、立春の朝日が匂うように、霞が漂っており、人間的な情愛を感じ、その自然の恵みに春の花が咲いている。という、情緒纏綿たる世界を詠出しているのである。立春の自然界の豊かな移ろいが、瑞々しいまでの表出によって描かれているといえようか。忠元の感性の素晴らしさがみえるのである。武将の内面的なるものが、美的なものであるだけに、その芸術性の豊饒が知られて感得してしまふのである。

(2)は、五七四句の浄書転写という。大友氏討伐のため豊後に出陣中か。(3)(4)ともに、奥書なく年代不明という。日常詠句の抜句集か。(5)は、忠元の『上洛日記』のなかの、文祿三年四月二十三日、日向佐土原での発句「行船に柳とりとりの手向哉」が、細川幽斎点削連歌の発句におかれたものという。忠元の上洛中の事であらう。在洛は、文祿五年までの二年に及ぶのであった。

幽斎と忠元は師弟関係にあったものか。京都文化の指導的立場にある幽斎を、懇に尋ねた忠元の積極的な一面が窺えて興味ぶかいものがある。また、『古今集』『源氏物語』等の諸本の書写もあり、『連歌三部書』(宗義三卷集)の書写も行なわれたという。さきの『寛兼日記』によると、天正二年から断続的に記された八年間の連歌会は八十三回という。しかし、忠元の出座は十二回であったとも。

彼の連歌会への出座の少なさは、武将としての繁忙のためか。従って記録に残る二千句余りの作品は、陣中、日常の詠出、独吟が大部分であったと思われるのである。忠元は、他に俳諧の座、酒・茶・雑談・閑談等々の座にも出たであらう。これら集団の遊びは、緊張緩和の方策でもあったものか。また、能・狂言・幸若舞と同時に行なわれていたのも、合戦中の恐怖心の除去のためであったのか。いずれにしても、中世末期の武将たちの文芸的な趣向は、誠に複雑多岐なものであったといえよう。

3

さて、本題の『新納忠元上洛日記』について、考察してみよう。鬼武蔵忠元も、主君島津義久が秀吉に屈服したことから、同調せざるを得なかったのは当然のことであった。徹底抗戦を主張した彼も、時の勢力(権力)の前には、どう仕様もないものであったのであろう。

主君義久が京都へ赴くというのである。忠元も、子息を人質に、主君に従って上洛したのであった。忠元の執筆した『上洛日記』は、出立から海路、室の津までの内容であり、貴重な在洛の部分が欠けていて残念である。とはいえ、いま、彼の『上洛日記』を披見してみたい。文学愛好家である忠元の筆になるこの紀行文は、仲々に興味を誘うものであるからである。

文祿三年、甲午、三月廿三日に首途申侍て、同卯月の十二日に大口を打立。

文祿三年(一五九八)四月十二日、北薩、薩摩大口を出立した忠元は、「飯野へまかりとまり」と、旅の第一日目は、飯野(宮崎県えびの市)に泊ったのであった。飯野城は、永祿七年(一五六四)島津義弘が城主となり、九州の諸豪(人吉の相良・伊東・大友・竜造寺氏等々)と勢力を争った。当時の飯野城は、鹿児島本城とともに、島津氏の二大重要根拠地であったという。天正十七年(一五八九)に、義弘が栗野城に移ってからは、地頭を置いてこの地方を治めた。忠元も上洛の旅の第一夜を、島津氏所縁の飯野城に宿泊したのか。簡単な忠元の記事からは、それらの事情は知るよしもない。

ここで、忠元の上洛の旅程を記しておこう。飯野―野尻―綾―佐土原(徳洲)―みみの湊―みみの湊(願応寺)―細島―よのつ(米水津)―嵯峨の関―みつ

くれ湊―野島（能島）―鞆―しも津る―牛窓―室の津（以下・欠）、日向路から海路（日向灘・豊後水道・瀬戸内海）を辿り、播磨の室の津までの旅程であるが、決して平穩な旅ではなかったのである。とくに、日向灘を航行するのに天候に妨げられて、難渋しているのである。

旅程を追って記述してみよう。

忠元は、約四十年間にわたり大口城主として治世にあたった。（後年、忠元をまつる忠元神社創建・〈天保十五年一八四四〉・疫病をしずめ、五穀豊穡をもたらす神とされる）。その薩摩大日から飯野までは、一日の行程であった。簡単な記事は前述した通りである。「明十三日には、野尻までまいり、十四日に、あやにとまり」とある。野尻（宮崎県西諸郡野尻町）の地も、島津氏の領有したところであった。（天正五年一五七七）。そして中世の交通の要地として知られるのである。綾は島津氏領であった。（天正十五年一五八七）、（現、宮崎県東諸郡綾町）。忠元の旅宿は、いずれも、島津氏の領有する地であった。

十五日 佐土原天神町までまかり著、船よそひなと申侍ければ其日もくれにけり。龍伯様はくかをほそへしまのことく此日御立になり。

綾から佐土原（宮崎郡佐土原町）へ着いた忠元は、「船よそひ」の為、当地泊りとなった。佐土原も島津氏（豊久）領であった。その日、主君島津義久（龍伯）は、陸路細島へ向けて出立したというのである。忠元は、「十六日に徳洲へ罷下、出船いたすへきやうすゝめ侍とも」と、佐土原の港徳洲から日向灘へ出る船旅となるのである。ところが、強風の吹く悪天候となって、徳洲の港へ停泊したというのである。そして、住吉明神に順風祈願の法衆発句「行船に櫓とりとりの手向哉」を詠んだ。

十日間の天候待ちの逗留は、「寄特にや、同廿五日にやう／＼船を乗出し、其夜みゝの湊口にひとつかめといふ沖にかゝり、其夜をあかし」と、神の加護を得て、やっと船で海上を旅することになったというのである。「みゝの湊」は、日向市美々津町の港である。神武天皇の東征に際しては美々津港より船立ちしたという伝承があり、周知されるところである。ところが、「明れは細嶋のことく心さしけれと雨ふり風もあらき由、舟人ともいひければ、みゝのみなとへをし入、其日は終日雨あられなくふりければ」の様子、風雨激しいこととて、「苦の雲に

ぬれたへかたかりければ」願応寺という一向宗の寺で雨宿りをしたのである。さすがの忠元も、風雨激しい海上の旅は耐え難かったというのである。「明れは細島へ舟をまはすへしと申けれども、浪高く風も何とかと申によって」と、また、「もとの寺へまいり」宿泊しているのである。二十五日、二十六日、二十七日の三日間、みみの湊の願応寺宿泊となっているが、「同廿七日龍伯様へあまりをくれたてまつり、しかるへからさる由申侍りて、無理に船をみみのまへの沖までこかせ侍れば、舟子とも申たるようになかはず、風にむかひ浪あら／＼しくて又みみへ舟をこかせ侍るや」とある。「廿七日」は、「二十八日」とすべきであるが、一日の誤記であると思われる。風浪荒々しい海上の旅に、みみの湊に四日間も停泊を余儀なくされた忠元の記述違いと考えられるのである。そこには、主君龍伯一行に遅れた苛立ちもあつたものか。一日違いの記述が続くのである。

「同廿八日は朝なきのよし聞侍てをし舟にて細島へ著侍る」とある。朝凧の時を細島（日向市）まで舟を進めたのである。

此日、近衛殿さつま坊ノ津のことく御船三そうにて御下向候。ほそしまへ御著岸と見え侍りぬ。

近衛信尹の薩摩坊ノ津下向途次細島到着のことを記している。左大臣の職を辞し、秀吉の朝鮮出兵に従って渡船しようとして、勅勘を受けた信尹が、薩摩に配流されたのであつた。『三藐院記』に、

廿八日、日出時分舟ヲ出シ細嶋に著、玄芳ト云寺ニ宿ス、所ノ肝煎ハ丹波ト名ヲ云、雨降。

とみえるのである。信尹の坊ノ津生活は三年間続いたのであり、それ等については稿を改めて考察してみたい。『三藐院記』によると、「廿六日（中略）嶋津龍伯ホト（保戸）へ著ニ由聞ニ依テ」の記事がみえる。龍伯一行は、保土（大分県津久見市保土島）に着いたことが知られるのである。当地にあっては、信尹は島津義久（龍伯）の許へ使者を送った記事もみえるのである。信尹と忠元の会見があつたものか不明である。両者の記録には、その事について何等記述されていないのである。細島でも風雨のため「二三日船をとどめける」という。信尹にも「廿九

日、雨」「卅日、雨降、八時分晴」「五月朔日、発足、晴天」等、天候の記事がある。ところが、忠元は、「五月三日に船をいたし侍る。／＼1／別ぬるとはの心ほそしさを漕出るふねの行衛しらねは」(数字は詠歌順、以下同じ)と、晴天順風の日の出航に際し、旅中最初の詠歌一首を記しているのである。地名「ほそしま」を詠みこんだ一首には、京への旅の心細さもあってか「船の行方も知らぬ」というのである。佐土原徳淵(港)から、日向灘を北上する船旅は、天候不順のため散々な目にあった忠元の心境の程が窺えるのである。

五月三日の夜は、豊後の内よのつ(米水津・大分県南海部郡米水津村)に着き停泊した。

同四日によのつをいたし、嵯峨の関まで十八里と哉らん申を、まことに鳥の飛やうにて著侍る。其夜雨のふりけるにとまりて、／＼2／旅寝する憂世のさかの関屋にてもりあかす雨に袖しほりつつ

とある。米水津を出航し、嵯峨の関(大分県北海部郡佐賀関町)までの十八里を、「鳥の飛やうにて著侍る」という。また、その夜は雨であった。その折りの詠歌は、「憂世のさかの関屋」と地名の佐賀と、世のならわしのさが(性・相)とを掛けて詠んでいる。旅情の思ふかいものがある。

「あくれば五月五日なれば故郷をおもひやりて／＼3／はるかなる旅にしあれば妹こよひひとりあやめをしき忍ふらん」とみえる。五月五日は五節句の一つ、男子の節句である。しょうぶをのきに差し、こいのぼり・よろい・かぶと・刀剣などを飾って将来を祝った。「あやめの節句」とも。武将忠元の端午の節句の一首は、「旅中であれば故郷の妻は一人淋しく端午の祝いをしていだろうか」という。望郷の詠歌は、何人も抱く感懐であらう。この佐賀の地には「三夜とまりて」とある。古来、海運地理上の重要地点として知られていたところである。「七日の日、舟出し侍りて、難渡と聞えたる豊後と四国との海をわし、其日は伊與国の内みつくれといふ湊に舟をとゝめ」と海流激しい難所、豊後水道を伊予国「みつくれの湊」に辿り着いたのである。「みつくれの湊」は「三机」か。^(まどろまれ)御着江とも書き、佐田岬半島中部、伊予灘側の三机湾口に位置している。いま、愛媛県西宇和郡瀬戸町三机である。地名は宇佐八幡の御分霊が漂着した入江(御着江)に由来するという。忠元は「みつくれ」と記している。折角停泊したが、満足な

宿はなく、やっと漁師の狭い宿を借りたのである。そこは海藻などの臭のするところで、わら筵を敷いて寝たが、蚊や蚤に刺されて微睡むこともできないまゝ、朝を迎えたという。短かい夏の夜であるのに、永い夜の様に思われ、「みしかき筆には盡しかたし」と苦笑した記述がみえる。旅の実感的な体験であらう。

同十日にみつくれの泊をいたし、野嶋とやらん昔は盗船を立ける所なれ共、殿下の御徳にて今は上下の船心安く侍りながら、沖中にいかりをおろして舟に明し侍とてよみ侍る

4／夏ながら船の綱手のななき世も夢はみしかきうきね也けり

瀬戸内海に船を進めた忠元は、野嶋(能島・今治市の沖)に停泊したのである。此処は、昔から海賊の出没した所であったという。この物騒な海上も、秀吉の徳政によって舟の航行も安心して航海できるといのである。天下を統一した秀吉への賛辞であらうか。能島沖に錨を下して停泊した折りの一首は、「夢は短かい浮寝である」というのか。翌朝早く出発した忠元は、「備後の国の内とも(鞆)といふみなどへ、十里の浪路をしきて舟をよせ侍て」と、瀬戸内海を東へ航行したのである。鞆は(福山市鞆町)古来、瀬戸内海を上り下りする船の潮待ちの港であった。地理的には紀伊水道と豊後水道・関門海峡の中間にあって、潮流の合流点であった。万葉歌人大伴旅人が任地大宰府からの帰路、往路にはともなつた妻をしのんで「吾妹子が見し鞆の浦のむろのきは常世にあれど見し人ぞなき」「鞆の浦の磯の室木見むごとくに相見し妹は忘れえやも」と詠んだところである。忠元も、「／＼5／舟留る此さとの名のともすれば故郷人のいともこひしき」と詠んでいる。「ともすれば」と地名から想起するのは、「故郷人」妻への思いであらうか。妻を恋しいという旅情は旅人の思いに相似たものでもあらうか。鞆から室の津までと出船したが、風雨に悩まされて、「備前の内とかや、しも津ぬ」に泊ったのである。しも津ぬ(倉敷市下津井)に停泊した舟の中で、「まどろまれぬまゝ神佛を憑たてまつる外はあらぬうき身の行衛なれば／＼6／かくてしもつかゐの頼をかけていのる神のたすけのある世とおもへは」と詠んでいる。「しもつゐ」「つゐの頼み」と神佛の加護を祈念する「うき身」(憂身)であるという。旅人の心は、旅の無事を神佛に祈る外ないというのは真実であらう。忠元も同様であった。

十三日の夜、下津井を出た忠元の舟は、備前国牛窓（岡山県邑久郡牛窓町）まで進んだ。「ゆふつけ鳥の啼し時分、十里の間を漕たる舟やう／＼著侍る」とある。その夜は雨であった為、船中に泊ったという。「／＼五月雨の空なつかしく明置□影せぬ夜はやうし窓の月／＼と、地名「うしまど」を詠みこんでの一首である。あけて十四日引潮時に牛窓の港を出たのであるが、降雨のため、「もとへ漕きもとてあかし侍、」という。牛窓へ漕ぎ戻ってきた忠元は、その夜「かくし題」の一首「／＼8／旅はうしまとひもて行舟路をもあはれと誰かいふ浪のうへ／＼と詠んでいる。「旅は憂し」と「牛窓」を掛け、「まどひて行く舟路を」、「あはれ」と誰がいいますか。旅の憂きことは、やはり実感的なものであり、率直な表白である。

五月十五日、牛窓から室の津（兵庫県揖保郡御津町室津）へ、十里の海上の旅が続くのである。海路「おもしろき瀧のおつる所へ船よりけり、しほをまつあひた納涼し侍て」とある。旅のつれづれは、おもわぬ景勝に出合うものである。忠元も、瀧を眺め、しばしの納涼を楽しんだというのである。「室の津へ鳥の時」に到着した。午後六時頃か。「其夜は舟にてあかし。明れは十七日にあけにあかり宿を。」（以下闕ク）と記されている。ここで『上洛日記』は終わっているのである。薩摩大目（四月十二日）より、播磨室の津（五月十六日）までの三十五日間の旅の記であった。

その詠歌は八首、いずれも地名を詠みこんで旅情を表白している。平明な歌といえよう。発句一句は法楽のものであり、旅の手向けであった。文章も雅文的和文で分り易い。忠元の文学的な才をみることができよう。

（注1）『近世初頭九州紀行記集』九州史料叢書。九州史料刊行会編・騰写印刷。
昭和四十二年九月十日発行

（注2）『日本人名大辞典』五巻・平凡社、覆刻第二版。一九八三年五月十日。

『鹿児島県の歴史』原口虎雄著（県史シリーズ）中世、2三州の統一。
3九州制覇の夢、参照。山川出版社。

（注3）『常山紀談』上巻、湯浅常山・鈴木棠三校註 巻之八所収『新納武蔵守豪気の事』角川文庫。

（注4）注1同書所収『九州御動座記』は「秀吉の島津征伐における薩摩までの道程、戦斗経過、戦後工作などを記したもので、交通史料としてのみでなく、島津征伐関係の一般史料である。なお、本書の作者は、従来、秀吉のお伽衆大村由巳とされていたが、否定の意見もある。」同書、解題。

（注5）『連歌俳諧研究』第二十三号、昭和三十七年七月。所収

同論文は「鹿児島連歌史試考」「新納武蔵守忠元の連歌」「むすび」から成り、西国薩摩の地の連歌の普及徹底を知る上で貴重なものである。

（注6）『宮崎県の歴史散歩』全国歴史散歩シリーズ・山川出版社。

（注7）『鹿児島県の歴史散歩』右同シリーズ。

（注8）注6同書。

（注9）注1同書所収『三藐院記』、前関白近衛信尹の日記。「信尹が文祿元年、左大臣を辞し、朝鮮役の出征軍に加わろうと後陽成天皇の勸應を伺ったが、勅許とならなかったため、肥前名護屋に於て、在陣の諸将に、自己の希望を披露しようとして、京より下向した所のものである。彼のこの行動は秀吉の怒りのかい、勅勘を蒙る結果となり、文祿三年四月薩摩坊津に流された。その折りの京より坊津間の紀行である」同書、解題。

（注10）『角川日本地名大辞典・愛媛県』角川書店。

（注11）『広島県の歴史散歩』注6、同シリーズ。